2011/8/29
月刊　（第三種郵便物認可）　第45326号

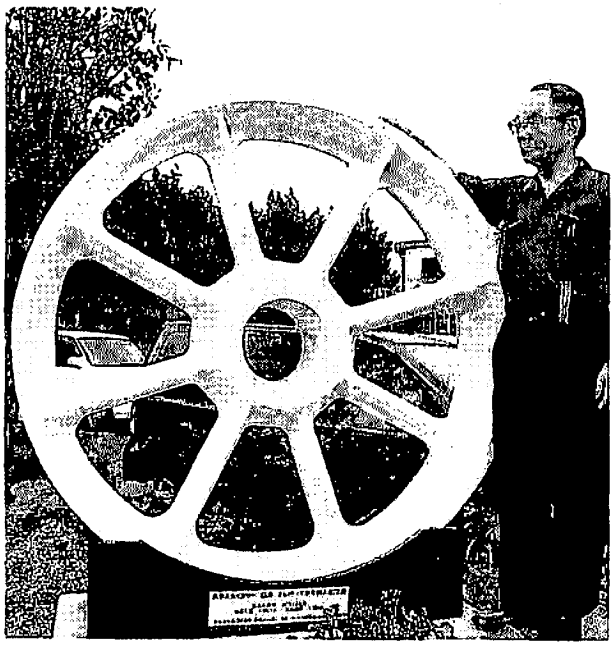
小さな会社 大きな仕事

社員36人、山形の渡辺鋳造所

スカイツリーに直径1.5メートルの滑車納入

高い技術で白羽の矢

高さ世界一の自立式電波塔・東京スカイツリーのメーンエレベーターの滑車に、山形市の渡辺鋳造所（渡辺利隆社長）の鋳物製品が採用された。直径1・5メートルという巨大滑車で、主なエレベーター8機のうち4機向けに納入。社員数36人の小さな企業ながら、極めて高度な技術を武器に大きな仕事を成功させた。



東京スカイツリーのメーンエレベーターに採用されたのと同サイズの滑車が、渡辺鋳造所本社前に展示されている　＝山形市鋳物町

1階から地上350メートルの第1展望台まで、40人を分速600メートルで運ぶ超高速・大容量エレベーター（東芝エレベータ製）の滑車。強度と耐摩耗性が同時に求められる。当初は別の企業が受注していたが製造できず、今年2月末になって、取引のあった東芝側から渡辺鋳造所にピンチヒッターとして依頼が舞い込んだ。

スカイツリーの滑車は巨大なため、より高い技術が必要。特に冷却をコントロールするのが難しいという。渡辺鋳造所がこれまで製造していたのは直径80センチ程度までの滑車だったが、独自に鋳物の成分調整を行い、3月から生産を開始。東日本大震災の際も資材調達の問題をクリアし、5月末までに納品を終えた。

同社は、強度と耐摩耗性に優れた鋳物素材、FCVPを日立と開発した1995年以降、この新素材を使った高層建築物用の滑車の受注を増やしている。滑車はワイヤなどと違い、随時交換できないため、30～40年の耐久性が必要。同社の製品は、欠陥のなさ、安全性から信頼を集め、ある大手エレベーターメーカーでは滑車のシェア75％を占める実績を上げている。

「小さい会社でも、求められる製品を作ることができれば注文が取れる。これがものづくりの真骨頂」と渡辺社長。スカイツリーは来年5月に開業する。

既に人気の観光スポットになっている東京スカイツリー　＝今年5月、東京都墨田区